

住 宅 と 家 具

金子 徳 次 郎

1. 現在日本の立式生活のための家具 はどうあるべきか

「坐式の生活より立式（イス式）の生活という叫びはもう相当以前から生活改善をとなえる有識者から起きておりその理由もわかりやすく、多くの人々にも充分認識されてきている。そして戦災により大きな住宅が失われ、その再建途上にある現在種々のスローガンを実施するによい機会はないにもかかわらず、今建てられつつある住宅の大半がやはり昔ながらの畳を主とした坐式生活による建築となつているのはどこにその原因があるのかこれをよく説明して見なければならぬと思う。

第一に習慣というか或は惰性というか、何となくやはり六帖間とか八帖間とかいう部屋を觀念にもつていて無意識にこれに進んでしまう点「やはり日本人は青畳の上にごろりと横になるのが一番だ」という程度の意識がこの内に含めてもよい。

第二には畳敷は何といつても融通がきくから、食堂にも寝室にも客間にも使えるから、という理論によつて選ぶ点。

第三には洋間にしたら家具に金がかかつてとても大変だという点。

第四には趣味からいつて床柱がどうの天井がどうのと一般的に共通している日本人のセンスの上から選べる点この四つの点にその原因があるといえる。

この四つの内第三の点を除いては現在の日本の状態からいつて解決の途はあり簡単であると思う。第一第二の問題は立式生活の合理性をよく説明すれば直ぐにも解決すると思える。

坐つた位置から立つ位置に要するエネルギーの消耗度と腰かけた位置からの立つのに使うそれとの比較、毎日のフトンの出し入れの面倒くさいことベッドの簡易さ、畳の上になる不潔さ、いくら融通がきくといつても居間や食堂から寝室に切りかえるための種々の動作は年中くりかえされるだけにその時間のむだと力の浪費を考えると、これらは建築家の手でうまく設計すれば同じ面積で充分にこの機能は満たせ得ることがわかるであろう。

こうした例はいくらでも実際に見ることもでき、書物の上でも知ることができる。

又第四の趣味の問題についてはこれをいう人達はごく少数であり、好き嫌いは理論の外であるからここで論ずる必要もない。

ただ第三の家具が高すぎてとてもイス式の生活ができないというのは、日本の現在の経済状態からしてなかなか難かしい問題を含んでいると思う。

現在の家具は確かに一般の需要者にとつては高価にすぎるといえる。ソファ一つでも3万から5万円、安楽イスなら一万円位が普通、小椅子が3500円の免税点以下のものならいわゆる安もので、すぐ毀れるようなものが多い。

鏡台も腰掛け式のものにはスツールがついて1万円以上になる。ベッドは2万なんていうのは安ものの部類でスプリングマットレスのついたものなら4.5万というのが普通、これでは一般の人達は手が出ない。

ところがこれが現在結構売れているように見えるのはこれを買えるだけの資力をもつた人達だけが買つて行くというのは当り前のようだけれど、結局は日本の人口に比して実に僅かの数量しか出ていないという意味なのであつて、このままで行けば結局この数は増えることはないということである「家具屋は大きくなるとつぶれる」という理由は能率を挙げられる一貫作業によつて大量生産すると需用面とのバランスが崩れてしまい、滞貨によつて倒産してしまうのである。

都会の需要者が最も多く求める市場たるデパートでも結局は見本市であつて「追加御註文に応じます」という貼札がかかげられているのは、現在の日本の家具はほとんどが小量づつの手さぐり生産で決して真の意味の計画的量産ではないのである。

つまり需要者の層が薄いことが量産を妨げ、ひいては高価なものにならざるを得ないのであるから、このネックを何等かの方法で抜けて行かなければならぬ。

これはまず最も安い家具を創作しなければならないのはもちろんである。単に安いという見せかけの価格のものだけではなく、見せかけの価格を耐用命数で割つた値＝実質価格が安くなければならぬが何れともあれ使うに耐えることを目標にできるだけ安いものを供給するようにならなければならない。

建築に住宅金融公庫の制度があるのであるから、もしこの立式生活を国民の体位の向上と国民生活の合理化として真剣にとり上げるならば当然設備金融公庫というものを設立して、立式生活を望むものには金融のあつせんをして然るべきだと思ふ。

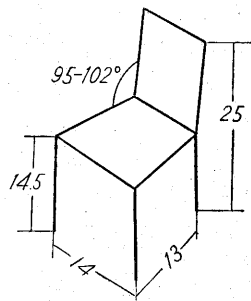
もちろんこの場合JISを決め、この最低のものゝ幾割かを貸すようにしたら立式生活は急速に採り入れられるのではないかと思ふ。

こうして一般に立式生活が浸透し需要層が厚くなれば自然家具は量産方式がとられ価格はずつと安くなるであろう。

2. 立式生活をするにはどのような建具が必要であり現在どのようなものが用いられているか

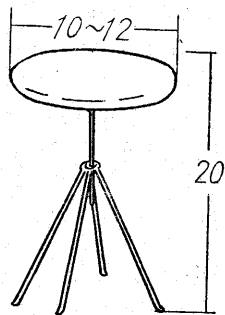
その種類、数量、大きさ、材料機能を概説してみる。まずイス類——立式生活といつても結局はイス式の生活様式である。大別して2種類、一は仕事用、一は休息用、仕事用とは炊事、洗濯、食事、書きもの化粧裁縫等を指し、休息用とは文字通り身心を休めるためのものである。

短時間の作業…食事、は一日に数回くりかえされ累計時間は長いがその都度の時間は比較的短い。だから座も固く、背の角度も食事時は上半身はいつも前傾しているから直立に近くなつていてもよい(第1図)。動かすから軽いことが必要である。材料としては木材が多く使われているが、リビングキッチンのような場合にはむしろ台所のものとして金属製のものが適当と思われる。背や坐の貼り生地はプラスチック・レザーが汚れも石鹸で洗い落せるという点で最適であろう。坐のつめものもスポンジ又はヘアロックの薄貼り位がかえつて使



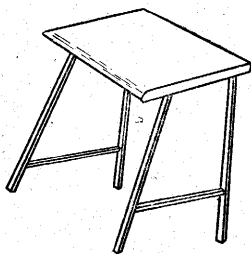
第1図

いよい。炊事時に使われる作業イスは日本ではあまり利用されていないが、当然あつてもよい品種であつて、背のない廻転するものが適当であつて高さも人によつて調節されるものがよいが、その標準高は2尺位である(第2図)。この材料もやはり金属製のものが望ましい。特殊なものとしてはミシンのイスがあるが、これは足部に力を入れる足踏式ではむしろ座が前傾している方がよい(第3図)。



第2図

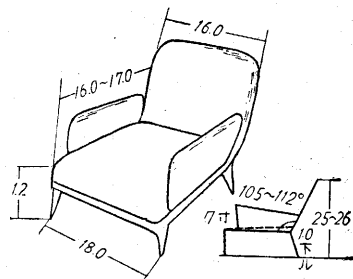
一般的にいって作業用の小イス類は繰返しの移動が激しいので軽量、堅牢が必要条件となつている。休息用となると座は低く背の角度は深くなる、と同時に身体の全体を柔らかく受けるため、座背の距りは厚くなり、スプリング、フアーロック、ホームラバー等の緩衝材が用



第3図

られる。とくに座高は二重にスプリングを使うことが多い。寸法も大きくなり肘をつけて休養姿を一層楽にすることが計られる(第4図)。

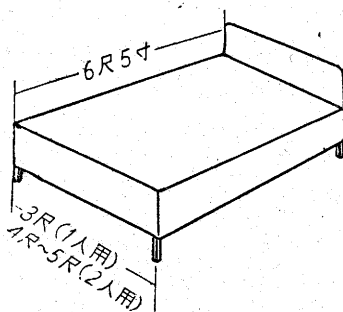
移動する頻度が少いから構造材料も重量を構わぬ木材を用いることが多く、張り生地も身体の感触から柔らかいモケットその他厚布地を用いることが普通である。又背や座の角度の可変なもの、或は足をのせる台を附したものの等が考えられ作られもしている。しかしこの品種も次第に変化しより軽くより堅牢により量産的になりつつあり、アメリカでは全プラスチック製或は或は金属とプラスチックの組合せによつて全体の形を人体のカーブに大体合せ、その差をクッションで補うという方法がとられつつある。将来のこの種のものの行く道を暗示している



第4図

休養の度がますます進んで行くどカウチ、ソファ、ベッドのようなものになる。

身体を斜めにする。寝そべる。寝るという姿態と内容からいつて一層柔らかな厚いクッション、大きな寸法が生ずる。(第5図)。近頃はソファ・ベッドが一種の流行となり、居間は居間に夜は寝室にということが行われているが、下手に用いると日本のフトンの出し入れと同じような消耗となつて、ベッドを用いる意義が半減するおそれがあり、これはむしろ臨時の客を泊めるための非常手段として用いられるべきであろう。又折りたたみのイス類も多く見られるが、これも補助イスとして用いるべきものであつて、常時に用いられるべきものではない。



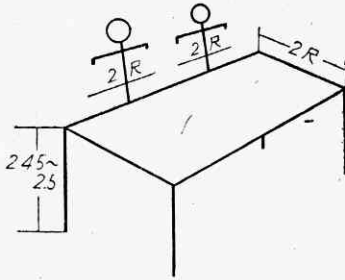
第5図

イスが人間の姿態を支持するものであるというのを原則とすればテーブルは適当な空間に安定した平面を構成するというのが原則である。不安定な平面はテーブルとしての原則にもどるといえる。

テーブルの種類には茶卓子、食卓子がある。食卓子は人体寸法から割り出されて一人当りの正面寸法が2尺を原則とする。高さは椅子との関係もあるが大体2尺5寸位が標準となる(第6図)。

甲板の材料は狂わないという意味から木材ならば合材

が望ましい、表面の仕上は耐熱、耐水耐薬品かういつて近頃使われはじめたプラスチックが望ましい。これは石炭酸系樹脂にメラミン塗料を焼付けたもので、



第6図

その表面硬度と共にかなり理想的なものであつて、アメリカではすでにすべての卓子に用いられてきている。

脚の材料は剛性を必要とし、しかも人間の下肢の位置からできるだけ余分な構造を用いたくないので、金属の方が望まれるが、木材でも構造的に満足し得る方法がとられればそれでもよい。

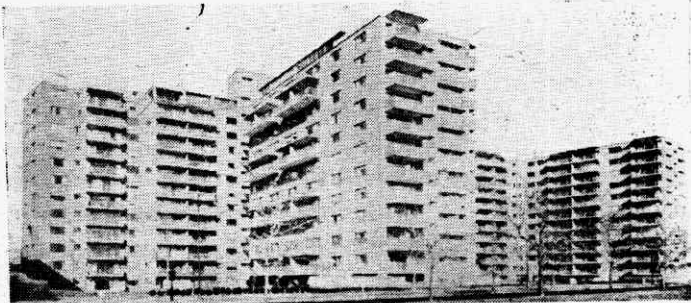
茶卓子は正規の平面寸法を必要としない。むしろ精神の遊びの時間に用いられるものなので、形状の遊びが許されるものといつてよい。しかし、表面仕上は食卓子と同様条件である。最近の傾向としては高さは漸次低く低くなつてきている。1尺2寸～1尺4寸位が普通となつている。

収納家具は、家具として独立するよりも、むしろ造り付けの方が望ましく、その方向に進んでいる。

洋服タンスなどは当然建築の中に含まれるものである。食器戸棚にしる、その他のタンス類にしる当然建築計画

(59 ページから続く)

屈でやりきれぬ感じがすることも事実のようである。この点はアメリカ人自身もいろいろと批判の声をあげている。各戸毎にテラスかバルコンをとれば、この点大分住み心地がよくなるわけであるが、それはすぐ建設費にひびくので、今のところこうした低所得者の公営アパートには実行不可能のようである。これは次項の高級アパートには盛んに採用されている。しかし建築家の中には、公営アパートについてもテラス付のものを熱心に提案しこのている人たちがいる。デトロイトに住む2世の建築家ミノル・ヤマサキ氏はその代表的な1人。彼の設計は注目されており、建築雑誌 Architectural FORUM などもしばしばとりあげている。



⑧ イーストゲーツのアパート

の中に含まれなければならない性質のものである。もし建築予算の中に含まれなければ少くとも仮込みの方法をとられるべきである。この方法がとられなければ居住面積をいくら計画したところで、6帖にタンスが2棟などということになり、崩れてしまうことになる。

ことに食器棚や食品戸棚などは深い奥行、広い間口を欲しいので、これを商品化することは難かしく、どうしても造り付けとしたいものである。現在市販のものなぞ店頭と並べておくためにのみ深い奥行寸法をもっているといつてもよく、このようなものがどれほど居住面積を狭くしているか、実際生活によく見られることである。

今まで述べてきた第一の問題に対する解明と、第二の問題に対する説明との間には大きな経済上のギャップがあることは確かである。第一は「かくあらねばならない」ことであり、第二は「こうなつてきている」ということ柄であるから、この矛盾は当然である。われわれはこのギャップを埋めるために努力しなければならない。これは到底一室内計画家、一建築家の力では成しとげられる問題ではなく、各方面の力が集められてはじめて成功し得ることである。

住宅も住むための機械であるならば、歯車ともいうべき個々の家具の問題が片付かなければ、その機械がうまく動かないのは当然であろう。

立式生活を日本人の間に浸透し、能率的な生活をなし得るため各界の協力を望むものである。(1952・8・29)

公営アパートにも高層ばかりでなく、2階建てで連続住宅の形式をとつたものもある。もちろん土地の条件が許さなければできないが、この方が戸外の自然との接触その他住み心地がよいとされている。

この高層・低層に関連して、建築家・住宅問題・都市問題関係者の間に望ましい住宅形式についての論争が展開されている。高層アパートか、低層アパートかあるいは一戸建集団住宅か? こうしたテーマはいわば宿命的なもので日本でも論じられたが、日本の場合抽象的な理想論議になるのに対して、この場合は現実的にどうするかということに立脚しているところが強味である。しかしこの結論はやはりなかなか出ないようである

4. 高級アパート 郊外のひろい敷地に一戸建の住まいを建てる代りに、市中の優秀な高層アパートに都市生活を楽しみたいというのも自然な気持である。こうした要求にこたえるために新しいデザインのアパートが建てられる。ボストンの MIT 科大学の建築科のスタッフが設計したイーストゲーツのアパートはそうしたものの1つとして有名である。これは高層アパートであるが、中廊下型の第

(31 ページへ続く)